

---

# 悪になりたがりの再生者

Soul Pride

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪になりたがりの再生者

### 【Zコード】

Z3259BA

### 【作者名】

Soul\_Pride

### 【あらすじ】

連續殺人鬼によって家族を失った少年、加添十四の突然の失踪。そこから物語は始まった。

魔法という物に関わり、劇的に生活は変わった。寂しさは埋められ、空白は、欠落はなにもなかつた。楽しかつた。嬉しかつた。心地よいものであつた。

しかし一方で十四は、心の中にある空白がないことに絶望した。求める物がない。それは、生きる活力がないと同じではないのかと。我慢ならなかつた。疼いた。渴いた。飢えた。欲望が欲しいと、十

十四は新しく手にした日常から決別するため、姿を消した……！  
失踪した十四を追うべく、魔法少女たちは空を飛ぶ。

IISとは違つて短い話を連続的に出してみるテスト的なものです。よつて更新頻度はこつちの方が多くなると思いますが、内容に関しては短いと思います。よろしく、おねがいします。

## 起源は慟哭、失踪

高町なのは、十歳。私立聖祥大学付属小学校五年生の彼女は走っていた。

息を切らし、学校帰りのままであることを制服と背負った鞄が示している。

走るのは得意ではない。運動神経は、なのははあまり高い方ではない。むしろ苦手な分野である。

荒い呼吸を繰り返し、全速力で疾走する。ペース配分なんて最初から考えていない。勢いを落とさず、速度を落とさず、さらに加速をしようとしている。

呼吸が辛い。脇腹に鈍い痛みが走りっぱなしで、足を動かすのが苦痛だ。

それでもなのはは足を止めない。走り続けて走り続けて、足が壊れるまで加速を止めない。

躊躇って転げる寸前になつても、コンクリートの地面に手をついてすぐさま体勢を整える。でのひらが擦りむけても、なのははまるで気にしない。

急ぐ。急ぐ。

いくら自分が辛かるうと関係ない。いくら自分が苦しかろうが問題ない。

痛みは我慢できる。苦しみは歯を食いしばれば誤魔化せる。

しかし彼女は我慢できない苦痛があった。

高町なのはは、自分の苦痛よりも、他者の苦痛がなによりも苦痛と感じ、我慢することができないのだ……。

「お母さん!」

ゼー、ゼー、と肩と背中を揺らし、息を絶やしながらなのはは駅前に店を構える喫茶翠屋へと飛び込む。

高町家が経営するこの喫茶店は、彼女の父がオーナー、母がパーティエ主持している。海鳴市でも有名所の一つに入る名店であり、なのは自身もそんな両親を尊敬している。

「どうしたの、なのは。そんなに慌てて……」「……が、いないの……」

厨房から、なのはの母、高町桃子が呼ばれて出でてくる。娘のいつも違う様子に、驚いた様子だ。

全速力で走ってきて声が枯れて「うまく出す」とができない。後先考えずに走ってきたツケが回ってきた。

桃子は一旦厨房へと戻り、コップに水を一杯くんでそれをなのはに渡す。ひとまず落ち着かせなければ話を聞くことができない。

なのははそれを受け取つて、一気に中身の水を飲み干す。

落ち着いたのか、呼吸も落ち着き、少しだけ冷静さを取り戻した。

「それで、どうしたの？ 落ち着いて話してみて」「いなくなつたの！ あの子が、あの子が……」

それでもなのはの顔は真つ青で。今にも目に溜めこんだ涙が零れ落ちそうで。体の震えが止まらなくて。

自分のせいだ。自分のせいだ。自責の念が、延々と責め続け、彼女の不屈の心が折れかねないほどである。

心に背負つてしまつた罪の意識は、彼女の小さい体を容赦なく押し潰そうとしていた。

「十四くんが、いなくなつちやつたのっ！」

とある少年の失踪、そして少女の慟哭から、物語の引き金は引かれた。

## 亡失、資質の覚醒

加添十四は十一歳、小学五年生のどこにでもいる男子だった。

空手を習い、サッカー少年団に所属し、塾通いに追われる、ただの小学生であつた。

……過去形となつてしまつたのは、現在の時間軸から一ヶ月の時を遡つた先に原因がある。

端的に言つてしまえば、加添家は皆殺しにされた。加添家惨殺事件。メディアで大きく取り上げられ、連日お茶の間をにぎわせ、恐れさせた。

その唯一の生き残りが十四であつた。殺人鬼から運よく生き延びた男の子。世間の同情の視線に彼はさらされた。

ここで話を終わらせててしまえば、平々凡々とは言えないがただの事件の一つとして数えられていた。次第に入々の記憶から薄れていき、そして忘れ去つていく。その程度のことでしかない。

しかし、話はそれで終わらせてはいけない。終わらせてはいけない。

本当の要点は、ここからである。

加害者である犯人が、管理世界 魔法使いたちの世界からやつてきた連續殺人鬼であつた。その殺人鬼も、魔法使い 魔導師であつた。

その殺人鬼は管理外世界の住人を集中的に狙い、家族単位から村単位で皆殺しにする。警察組織であり司法組織である管理局から次元世界へと指名手配された、特S級の札付きの犯罪者であつた。魔導師と魔法を使えない一般人との力の差は絶望的と言つてもいい。単騎のエース級魔導師は一国の戦力と比肩することだつてある。さらにその殺人鬼は魔法の腕も冴え、転移魔法の達人。短距離移動から次元跳躍まで使いこなし、管理局の手から逃れ続け、殺人をし続けてきた。

そして第97管理外世界、地球の日本の、加添家に殺人鬼は標的を定めた。

その日、日曜日であった。雨の日であった。仕事で忙しい父親も、家事に追われる母親も、部活動に熱心な兄も、偶然が重なったように休みが重なり、その日サッカーレ少年団の練習試合があつた十四もあいにくの雨で注視となり、退屈していた。

どこか食べに行くか。

父からの提案。それを歓迎する母。そして、どこに行こうかと兄。  
どこに行きたい？

父は息子たちに何を食べたいと聞いた。

どうする、何が良い?と兄は、十四に決定権を譲つた。  
十四はふと、赤身のマグロが食べたいと思った。

寿司。回転寿司がいい。

よしきた、と父は車のキーと財布を用意し、母は化粧をし、兄弟はいまかいまかと待つた。

支度が終わり、外へ出ようと家族全員が玄関へと向つたその時。

惨劇は、起きた。

十四が自我を取り戻した時には全てが終わっていた。

体にはいくつもの裂傷。骨折。座り込んだまま動くこともできず、全身から走る激痛が激痛でなくなつて麻痺となり、吐き気を催すほどに苦痛であった。

目がかすみ、氣だるさに満ちている。どうしようもなく、体が重い。

いつもより、視界が狭い。左目は潰れていた。

なにも、音が聞こえない。鼓膜は破れていた。

それでも、十四は生きながらえていた。

何が起きたと混乱したが、白くかすんだ見まわそうとする。

そして、すぐにわかり……思い出した。

見慣れたはずの自分の家。それが今までにみたこともないくらいに荒らされていた。

家具類は倒れているのは当たり前。壁に穴は空き、床はめくれ、壊れた家電からは火花は散り、天井は空をのぞかせていた。

そして、ほとんど感覚のない両手に持つていたモノ……それは……。

この惨劇を引き起こした男の首級と、両親と兄の命を絶つた真っ赤に血塗られた殺人鬼のナイフだった。

ああ、そういうことなのか。

まるで他人事のように、冷静に、起きたこと、起こしたことを次々と思い出していた。

それを頭が受け入れた時には、瞼を開いていることすら限界になり、疲れが誘う眠気に素直に従つて少しずつ目を閉じていった。

最後に覚えていた記憶は、白いロングスカートの少女の姿であった。

加添家惨殺事件の三日後に、加添十四は時空管理局本局の集中治療室にて意識を取り戻した。

酸素マスクをし、点滴と輸血の針を刺され、全身を包帯で巻かれていた。

記憶の混乱はなかった。

家族が殺されたこと。家族を殺した男を自分が殺したこと。全てを受け入れていた。

不思議と、悲しみは沸いてこなかつた。悲觀に暮れ、絶望に満ち、泣き叫ぶようなことはなかつた。ただ、事実をありのまま受け入れていた。

今自分がすべきことを「己の体の回復と考え、また目を閉じて眠りにつく。

…………「己のとき、十四自身は己の体に起きていた異変に、気付くことはなかつた。

## 無力、届かぬ者の哀

高町なのはは、強い罪悪感に苛まれていた。

私のせいだ、私のせいだ、私のせいだ、あの子を助けられなかつた……。

自分が遅かつたから。自分がやつてくるのが遅れたから、加添家を助けることができなかつた。加添十四に大怪我をさせ、人を殺めさせてしまつた。

自分の持つ魔法の力は、誰かを助ける力。泣いている子の涙を、止めるための力……そうではなかつたのか。

何が魔法だ。こんな力を持つていても、救えなければ何にもならない。なのはは、自分がどこにでもいる無力なただの少女であることを知つた。

魔法という特別な力を使えても、結局は十年ちょっとしか生きていらない女の子。多くを求めるには彼女には酷過ぎた。

それは彼女の関係者はよく知つていてる。関係者でなくとも、彼女を知ればそう思う。しかし彼女自身は、誰よりも自分に厳しすぎた。誰よりも他者に優しすぎた。

うちしかれる無力感。容赦なく責め立てる、自分が弱かつたからあんな結果になつたという現実。

事件現場を見て、口を手で押えても胃の中から湧き出てくる物を残らず吐き出し、無力感という剣を突き立てさせるには幼すぎた。

しうがない、の一言で済ませられるほど、あの光景は忘れられるものではない。否、忘れてはならないものだ。

……あれは、己の罪の証なのだから。

高町なのはの心は、折れる寸前にまできていた。高温に熱されたアルミの針金のように、ポツキリ容易く折れ曲がりてしまつくらいに。

ただ、いつまでも折れているままでもいられない。いつまでも泣いているわけにもいかない。

涙は流した。思う存分後悔した。だったら、そこから何をすべきか。

高町なのはは、いつだつて、ビゴだつて、転んだらすぐ立ち上がつていた。

あまりにも強すぎて、あまりにも不屈すぎて、あまりにも……憐すぎた。

涙を拭き、双眸を見開き、また前に進むしかない。

高町なのはは、そうすることしかできない。

加添家惨殺事件の翌日、早々にショックから立ち直つた彼女は、生き残つた少年 加添十四について調べ上げた。

知らなければならないと思つた。知りたいと思つた。知つて、彼に謝らなければならなかつた。

願わくば、彼に許してほしかつた。

許されなくとも、自分を罵倒し、貶し、軽蔑してくれてもいい。それで気が済んでくれるなら、喜んでそつするつもりだつた。

加添十四。集中治療室で見た全身包帯まみれの姿ではない素顔の写真は端正な顔立ちで、硬い表情であった。

歳は十一歳でなのはと同じ学年の小学五年生。同じ年に当たる。

生年月日は四月三十日。血液型は A B。

市内の市立小学校に通い、同じ町内の空手道場に通い、サッカー少年団にも所属し、塾にも通つていた。一週間の予定は全て習い事で埋まつていたといつ。

学校の成績は良く、学年でも上位に食い込み、運動神経に至っては学年で随一を誇っているという。サッカー少年団では五年生ながら六年生に混じってもレギュラーポジションを持ち、エースプレイヤーとして活躍。空手でも茶帯で、初段である黒帯を取得できる年齢になればすぐさま取れるという評価であった。

友人の数は多いが、独りでいることを好んでいたといふ。

独りでいることを好んだ、と資料にはあるがなのはには彼の目に寂しさを感じさせなかつた。

独りでいる寂しさには一際敏感であるなのはには、十四には孤独の辛さは伺えなかつた。

たとえ独りであつても、その実周りには友人が多かつたからこそ、孤独の辛さはない。

……しかし、今までそつだつたかもしれないが、これからは違う。

彼は家族を失つた。本物の孤独を知ることになるだらう。自分が彼を孤独へとおいやつてしまつた。

ならば、その孤独を埋めるのが自分の役目である。それが償いとなる。

友達でいい。名前を呼び合つよつな、そういう関係で。

憎悪の対象でいい。心無い言葉を向けられても、それでいい。

高町なのはは、そう誓つた。

加添十四の眠る集中治療室に、彼を見守る者たちがいた。

「……意識を一度取り戻してから、全身に魔力を巡らせて回復効率

を上げている?」

「はい。リンカー「アを起点に、血管と神経に魔力を巡らせて、細胞の分裂数を上げて治癒を行っているようですが……おそらく、彼は無意識でやっていると思います」

その人物は、時空管理局本局次元航行艦アースラの艦長リンディ・ハラオウンと、十四の担当医務官を務めるシャマルであった。

シャマルの書き込んだカルテを見たりンディは、やはり十四には魔導師の資質を示すリンカーコアを持っていることを確信した。それも、強力な魔導の才能を秘めていることを。

管理局が幾度も手を焼いたあの殺人鬼を手にかけた。恐らく、危機的状況に置かれたことで防衛本能が眠っていた魔導の才能を起こした、というのがリンディの推測であった。

目覚めたばかりの魔法は暴走し、殺人鬼を殺すほどにまで及んだ……いや、十四は暴走を止めるつもりはなかったのだろう。家族を殺した相手だ。憎悪に体を委ねて報復したという方が自然に思えた。

「呼吸、心拍共に安定してますし、脳波に異常はありません……。明日にでも一般病棟に移転しても大丈夫なほど……」

「……ちょっと待つてちょうどい、シャマルさん。この怪我で?どう見たつて、一週間はここで安静にするべきと思うわよ私は」

本職の目ではないが、リンディの視点から見れば診断書の怪我の内容はそんな短時間で治るほどのものではないと即答できた。管理局の高い技術力を以てしても全治一年半がいいところ。もちろん治療後のリハビリなどを抜きにしてだ。

十四は生死の境を彷徨つっていた。内臓は残らずズタズタ、無事で済んでいるのは肺と心臓くらい。骨は肋骨のほとんどが複雑骨折しており、四肢の骨もほとんど同じ。片目が完全に潰れ、血液は圧倒的に足りなく、輸血があと少し遅れいたら手遅れだつた。

その状態に置かれても十四は生き延びようと驚異的な治癒力を発揮していた。  
もはやそれは治癒といつゝ再生に近い。

「私も驚いているんです。自力の魔力が足りなければ病室の魔力を収束して取り込んでいるくらいですから。このペースが進めば明日また意識は回復するでしょうし、出歩くくらいの体力も出てくるでしょう」

「そこまでの回復スピードだといつの……」

治療系の魔法は存在し、シャマルも他に並ぶものはいないほど使い手はある。

しかしそこまでの治癒スピードは魔法で再現することはシャマルでも不可能である。

無理があります。そんな都合のいいことがあるはずがない。リスクがないはずがない。専門家としてシャマル、高い魔法の技量を持つリングティは同じ結論に至っていた。

「人の細胞分裂の回数は決まっているわ。このままだと彼の寿命を縮めることに……」

「止めようとしたなら、数分と経たず危篤状態に逆戻りです。私の手では、そこから容体を安定させることは不可能です」

魔力の循環を止める手段は存在する。それをしたなら確実に十四は死ぬ。こうして容体が安定していることが奇跡なのだ。  
無力感を味わう者が、またここに。  
誰もが、何もできないと嘆く。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3259ba/>

---

悪になりたがりの再生者

2012年1月8日21時54分発行